

研究課題：「男性介護者のケア・コミュニティ構築と包括的家族介護者支援に関する実践的研究」

代表研究者：津止 正敏(立命館大学産業社会学部 教授)

1. 本研究の背景と目的

本研究は、男性を介護者とする家族介護の実態調査を通じて、家族介護が直面している問題を具体的に析出するとともに、介護当事者と支援者が構築しつつあるケア・コミュニティについての実践的研究として構想した。また本研究は、制度レベルでの支援のみならず、家族介護者支援のあり方として、男性介護者自身の組織化とエンパワメント・アプローチに着目してきた。この支援は、家族介護者支援の有効な支援モデルとなると同時に、地域社会で家族介護者支援に関わる多様な援助職（ケア・マネージャー、医師、社会福祉士、介護福祉士、ヘルパー、保健師、看護師、民生委員等々）の援助アプローチのあり方としても活用しうる具体的な提言となると考えた。そして長期的には、ケアを排除して成り立つケアレスマンモデルから脱却し、ケアをインクルーシヴした社会＝ワーク・ライフ・ケア・バランスのあり方を射程に収める研究として、その展開可能性を展望した。

上記の研究目的にそって研究及び実践支援に取り組んだ。本報告はその研究成果と課題についてその概略をまとめている。

2. 本研究の内容と方法

本研究は、男性介護者と支援者の全国ネットワーク(以下、男性介護ネット。事務局：京都)及び同ネット参加団体をカウンターパートとして設定したこともあり、実践に寄り添い実践に寄与することを念頭に置き下記の内容と方法によって調査研究を進めてきた。

本研究の内容は、①男性介護者の介護実態を明らかにし、特に家族介護者の社会参加の実態とそれを阻害する諸要因の解明を行いつつ、本研究テーマ「ケア・コミュニティ」の開発課題を介護者運動とその相互作用によって構想した。②介護保険など介護支援制度の現状と課題を、男性介護者という利用者視点から把握した。その際、就労支援型介護サービスの開発課題など介護と仕事の両立(ワークライフバランス)という視点にも着目した。③ケア・コミュニティ開発のプログラム及び家族介護者支援を提起すること、とした。

その方法は、①男性介護者と支援者の全国ネットワークの会員を対象としたアンケート調査を実施した(平成22年9～12月)。②男性介護者の会や集いなど当事者や支援者が取り組む活動や組織についての参与観察を継続して行った(平成22年10月～平成24年9月)。③男性介護者と支援者の全国ネットワークの主宰する介護体験記発行事業(『男性介護者100万人へのメッセージ(第1～3集)』)の分析(平成22年10月～平成24年9月)。④さらに本研究と関連して、京都市(男女共同参画課・コンソーシアム京都)と男性介護者の介護と仕事の両立課題について共同研究を行った。そこでは男性介護者及び事業者へのアンケート調査及びインタビュー調査を実施した(平成23年11～12月)。

3. 男性介護者の介護実態－「介護体験記分析」「男性介護者と支援者の全国ネットワーク会員調査」から－

本研究では二つの調査によって男性の介護実態をみた。

一つは、2010年9月から12月にかけて、男性介護ネットのとの共同で実施し、現役介護者としての会員に対するアンケート調査である。約140人からの回答を得た。調査データの解析結果は2011年9月に『男性介護者の介護実態と支援の課題－男性介護者と支援者の全国ネットワーク第1回会員調査報告書－』として公開してきた。①高齢の介護者が多く、介護者の健康状態も深刻である。②介護負担は長期化・重度化する傾向にあり、孤立する男性介護者が多い。③サポートネットワークは、娘を中心とする家族と、ケアマネを中心とする専門職に二分している。④仕事との両立は難しく、介護離職が増えている。⑤家族介護者が「声」を上げることが重要である。⑥介護者の語り、会員の日々の介護生活の大きな支えとなっている。以上が調査結果のポイントである。

もう一つは、男性介護ネットが発行する介護体験記『男性介護者100万人へのメッセージ』(第1～3集)の分析である。収録されている421人の介護体験記録からその介護実態を検証しつつ、介護体験を記すという取り組みについて検討した。介護関係では妻を介護する夫が275人、親を介護する息子が120人、その他26人。本書には「皆さんの貴重な経験が胸を打ち、行く手を明るくしてくれました。辞書のように手近において繰り返し読もうと思う」という男性介護者(89歳)の読後感想もあった。介護体験を社会の経験知として共有・蓄積しようという試みに多くの共感が広がっていると実感させる感想である。自らの介護体験を書く、そして他者の記録を読むという取り組みを、本研究ではケア・コミュニティ開発に貢献する「書く／読む」プログラムとして整理してみた。男性介護ネットの会員調査結果とも符合するが、ケア・コミュニティの開発にとって介護の体験を記録する「書く／読む」プログラムの持つ有効性として強調したい。

4. 各地の男性介護者の組織・活動への聞き取り調査と支援

参与観察も含め、この2年間に研究代表者(津止)らが参加・講演・交流・助言・情報交換に関与した活動や団体は以下の通りだ。

男性介護者の固有の組織や活動は以下の通りだ。北海道「ぼだい樹の会」(東川町)・「北海道男性介護者の集い」(札幌市)、岩手県「地域介護支援を考える会」(宮古市)、東京都「オヤジの会」「男性介護者サロンM」(荒川区)・「ダンディライオン」(国分寺市)、山梨県「やろうの会」(韮崎市)、長野県「シルバーバック」(上田市)・「男介護もいいもんだに」(伊那市)・「茅野男性介護者の会」(茅野市)、静岡県「男性介護者の集い」(静岡市)・「NPO 法人 岳南生き活きクラブ」(富士市)、石川県「百位万石メンズ倶楽部」(金沢市)、滋賀県「男性介護の集い」(近江八幡市)・「ケアメン(男性介護者)の会」(高島市)、京都府「TOMO」(京都市)・「男性介護研究会」(京都市)・「男性介護者の集い」(木津川市)、大阪府「陽だまりの会」(大東市)・「ほっこりサロン」(大阪市)・「福島男性介護者の会」(大阪市)、兵庫県「NPO 法人スマイルウェイ・ほっこり庵」(宝塚市)・「宍粟市男性介護者の会」(宍粟市)・「NPO 法人介護コミュニティ咲咲館」(西宮市)・「きたいの会」(伊丹市)・「ぼちぼち野郎の会」(三田市)・「たつの男性介護者の会」(たつの市)・「つむぎ男性介護者の会」(神戸市)・「いどばたサロン」(明石市)、岡山県「岡山男性介護者の会」、同「じっくり聞かせて男の介護」

(倉敷市)、広島県「NPO 法人悠々自在」(広島市)、鳥取県「男性介護者ネットワーク鳥取県」(米子市)、島根県「男性介護者の集い」(松江市)、愛媛県「男性介護者の集い」(松山市)、「男性介護者九州ブロック」(福岡市)、である。(社)認知症の人と家族の会(本部:京都)でも宮城・福島・滋賀・京都・大阪・滋賀・鳥取・富山・徳島・福岡・佐賀・大分・宮崎・長崎・熊本の各支部でも「男性介護者の集い」が始まり、さらに広がる気配という。この他にも各地に同種の活動や組織が確認されているように、同じ立場にある男性介護者同士の交流を広げる取り組みが全国に広がっている。

男性介護者をテーマとして市民研修を実施する社会福祉協議会や男女共同参画センター、包括支援センターも増えてきた。そして、そこでの主役は自らの介護体験を語る男性たちだが、上記の伊丹市や伊那市、宍粟市、高島市、近江八幡市での取り組みのようにこの講座終了後に、男性介護者組織や活動も生まれているのも、援助機関の支援プログラムということでは示唆的である。

上記の会や集いには、介護体験を語る、そして聴くということ以外に特別なメニューが揃っているわけでもない。ただ、介護する男性という同じ立場の人と唯一交流できる場であり、だからこそ気兼ねなく自分自身のプラス、マイナスも含めた介護感情を飾りなく吐露出来る場になっている。ただひたすらに話す人、聞き上手、頷くだけの人たちが織り成す短い交歓には「ひとりじゃない」という確かな実感がある。介護によって社会との関係を絶たれた男性介護者の社会性を回復する場でもある。自分も含め同じような立場の人への思いやりや気遣いは、失いつつあった社会との接点や連帯感を実感し新たに修復するような貴重な関係性に溢れている。

介護体験記での反響に表れているような介護体験を「書く／読む」というプログラムとしたが、本研究ではこの自らの介護体験を「語る／聴く」プログラムとして整理してみた。ケア・コミュニティの開発ツールとしてすこぶる有効なものとなっている。

5.男性介護者の「ケア・コミュニティ」の意義

ケア・コミュニティの意義について指摘して、本研究のひとまずのまとめとしたい。

社会学者・春日キスヨは著書『変わる家族と介護』(講談社現代新書)に次のように記している。「介護を、女性のように慣習にしたがって引き受けたのではなく、自らの選択意思で引き受けたことが、こうした(筆者注—介護事件の温床となるような)男性介護者の弱点といわれることにつながっているのではないだろうか」(同書 143P)。私もまた春日に同感する。同時に、自分の意思で引き受けたわけではない、望んだわけでもない、介護するしかないんだ、自分しかいないんだから、という多くの男性もいるということもまた事実だ。硬い意思で気構えて介護役割を引き受ける人、こんなはずではなかったと戸惑いながらも介護する人、この両極いずれもが男性介護者の典型である。女性のように「慣習」(春日)という日常化された介護実態とは様相を異にするような、これまでの日常とは一線を画する「非日常化」された暮らしこそが男性介護者の介護実態を特徴づける。「非日常化」された介護は、介護を担う者のこれまで生活をすべて排斥する。これまで長期に亘って大事に培ってきた社会との接点を奪い去っていくということ、本研究との関連でいえばここにこそ男性の介護実態が示唆する介護問題が潜んでいるのではないか、ということである。

繰り返すことになるが、再度整理しておくこと次のようになる。戸惑うのは排泄や入浴、

清拭、食事援助、移動介助などといった介護だけでない。これまでの暮らしや働き方などあらゆる矛盾が、介護と共に一斉に吹き出してくる。一言で言えば、男性介護者には、介護はもちろんだが、慣れない家事にも戸惑い、収入は減り出費はかさむという貧困化に苦しみ、離職に伴って社会との接点が断たれて、24時間介護付けという社会との接点を欠いた孤立した生活にもがく。介護から派生する諸課題が立ちほだかっているということだ。ケア・コミュニティの開発と包括的家族介護者支援の課題である。

全国に広がる男性介護者の会や集いなどのコミュニティに関して、会や集いの参加者あるいはそれを運営する主催者から次のような声が聞こえてくる。①同じ立場の人との出会いの場、②プラス、マイナスも含めた介護感情を吐露する場、③「ひとりじゃない」ということを文字通り実感する場、④介護者の経験が生きる場(「経験知」)、⑤介護者と支援者の相互作用が働く場、等々という声である。これらの声は確かに事実には依拠しているが、一方では「単なる愚痴の場」「傷の舐め合いの場」であり、現状では必要性があることには違いないが積極的にはその意義を認めにくい、ストレス発散の場だが消極的ではないか等々の批判にも晒される。何れもが肯首しうる意見ではあるが、ただ、以下のようにも言える。多くの参加者が実感する同じ立場の人との共感や気遣いは、彼らが介護によって失った社会との関係を、今度は逆に介護という体験を通して修復する。社会関係の再帰性だ。このコミュニティは社会との接点を修復しさらに太くしていくような場、空間、関係である。「ほっておけない」という「ケアの衝動」ともいべき介護によって繋がる人と人の関係性は、経済合理性という「市場」がつくる関係性の制約を乗り越える。現状では萌芽的ではあるが、ここにケア・コミュニティの可能性があると私たちは考える。

男性介護ネットが主宰する体験記募集のコピー「あなたの介護体験を社会の共有財産に」は、人称(あなた)と非人称(社会)のコミュニティ(連帯)を繋ぐスローガンである。

おわりに

本報告では、本研究の内容や方法で記した介護と仕事の両立課題(ワーク・ライフ・バランス)に関する結果報告には触れていない。本研究分担者の斎藤真緒が京都市(コンソーシアム京都) 研究報告書に「家族介護者の仕事と介護が折り合う環境(ワーク・ライフ・ケア・バランス)の実現に向けたニーズ分析と支援策の課題」としてまとめているので参照されたい。この分野はますます重要な実践的政策的課題となっているので、引き続き継続して研究を進めていこうと思う。

以下私たちの研究成果をまとめたものを一部記して本報告を終える。これまでのニッセイ財団のご支援に感謝します。

〈研究成果〉①津止・斎藤『家族介護者支援を考えるー日本と英・豪・米の比較研究ー』立命館大学人間科学研究所、2010年12月。②津止「男性介護者100万人の時代ーケア包摂型コミュニティを展望するー(1~6)」『介護新聞』(北海道医療新聞社刊)連載記事、2011年3月~2011年4月。③津止・斎藤『家族介護者支援の論理』立命館大学人間科学研究所、2012年2月。④津止「男性介護者へ贈る言葉(1~12)」時事通信社配信記事(釧路・八重山毎日・京都・西日本・岐阜・山陽・新潟日報各新聞掲載)、2012年4月~7月